

合併当時の思い出

林 彰

同志社が香里学園と合併したころ（昭和二十六年）の回想記は、たとえば、『二十年の歩み』や『香里の丘』（共に同志社香里中高発行）に掲載されたものだけでも、かなりの数にのぼる。

しかし、これらの回想記の多くがそれぞれ執筆者の長年の経験による幅広い視点を持つのに比べて、以下の文章は視野も狭く、まとまりに欠けるうえ、万事「私」本位の個人的感想の域を出るものではないと懸念されるが、ともかくここで、合併当時の思い出のうち特に印象に残っている幾つかを綴ってみることにする。

◇山田先生との出会い

たしか二十六年初夏のころだったが、同志社高校（岩倉）の旧校長室に山田貞夫先生をお訪ねした。私は戦中、大学予科には学んでいないのでお目にかかるのは初めてであったが、先生の令名は早くから承知していた。

この時、どういってお話が出たのか詳しい記憶はない。ただ、近々合併予定の「香里」で教える意思と覚悟があるなら考えてみてはどうか—そういう要旨だったと思う。とにかく、その日が先生の面接であったことは間違

いない。

私の眼には、その時、初対面の先生がかつて出会ったどの人よりも不思議な魅力に溢れる人物に映っていた。それは抗いがたい新鮮な魅力であった。私はお話を聞きながら、もし採用されるのであれば、仮りにどんな多難な将来が予測されようとこの先生にすべてを託したい、と心の中で呟いていた。

その後二、三度本部でお目にかかった際にも、先生にたいする印象は少しも変わらなかつたばかりでなく、益々魅きつけられるものを感じることになった。

今振り返ると、ちょうどその時期は先生が新しい、しかもまだ未知数の学校開拓の事業に全責任を負い、重大な決意をされていたころである。私が先生に感じたあの魅力は、おそらくそうした先生の決断から生まれる魅力であったのかも知れない。

一方、大学卒業後しばらく母校を遠ざかっていた私は、たまたま先生を通して同志社の息吹きに改めて触れ直したためでもあろうか。いずれにせよ、あのころ先生にお会いした体験は、私にとって、さながら突然の「啓示」の如きものであった。：教週間たち、幸

いにも新発足の同志社香里中学・高等学校で教鞭をとることを許された。

◇初めての香里

夏の一日、私は独り香里に出かけていった。この眼で新しく働く場所を確認しておきたかったからだ。駅から南へしばらく歩いたが、不案内のため学校の所在がわからない。当時はまだ一台の車も通ってはいなかった。ドウシヤになる学校を村の人に尋ねても一向に埒があかなかったが、やっと年輩の女性が「サンスイ(山水)のことです」^{ろく}と指さして教えてくれた。かなり離れた丘の上にそれらしい姿が見えた。

汗まみれで回り道に時間をかけ、緩やかな斜面を登って正門のあたりにたどりつく、都心に育っていない私にも驚くほどの自然が、そこにあった。一面の田園風景と点在する農家に池。背後には小高い山が続いている。遙か西北に、淀川の提防を越えて対岸の町々を一望の下に見渡すことができた。美しいところだ、と直観した。

変化の多い地形の校内を一巡すると、強烈な真夏の太陽に幾棟かの木造校舎がひっそりと、白っぽく包まれていた。屋根にはペンペ

ン草がみられる。周囲は緑なす木立ちと蟬時雨。夏草が生い繁り、人影はまったくなかった。建物は古いけれど、全体が落ち着いた佇まいで、何か整然としたものが感じられた。

私はかねてから新制度の高等学校にある種の憧れを持っていたが、この丘の広大な敷地を前にして、果たしてこれが学校なのだろうか、と、一瞬わが眼を疑ったほどだ。しかも、これが本当に同志社になる学校なのだろうか……。私は胸の高鳴りを抑えることができなかった。

三十年の歳月を経ても、なぜか、この日の記憶が鮮やかに焼きついている――。

◇出発の日

九月十四日はいよいよ開校式、秋の気配のただよう爽やかな日であった。初代山田校長の就任式のと、私たち新任教師が紹介された。壇上の私はひどく緊張していたのか、七百余の生徒の真剣な眼差しを全身で受けとめる以外、ほとんど無我夢中の状態だった。だが、生徒全体がきちんと礼儀正しく、よく躰けられている様子は手にとるようにわかった。新任の先生の中には、間もなく練達の名教頭となられた下山先生がおられた。また、文

字通り全身全霊をあげて宗教々育の指導に当たられた西邨・堀内両先生、温蓄のある学究肌の赤尾先生等々も同じ壇上に並んでおられた。全部で八名だった。

私はまだ若く教壇経験が皆無だったが、それでも私の決意と情熱を支えてくれるものは唯ひとつ、この真新しい学園がすでに紛れもなく母校同志社であり、その一環として今まさに発足しようとしているという厳粛な事実であった。それは私にとって、極めて重要な意味を持つ一事であった。細やかな能力を振り絞って、母校のため、多くの人びとのために奉仕しよう……ただそのみを祈った。

◇教員室

合併という特殊事情に多少「構えて」いた私も、日が経つにつれて、それが杞憂にすぎないことを知った。旧香里の先生方は皆温かく、紳士的であった。殊に年輩の先生は個性豊かな人が多かったけれど、良識派であり、無言のうちに私たちを指導してくださったし、私には昔教わった懐しいタイプの先生だった。同世代の先生ともすぐに親しくなれた。誰一人「トゲ」のある人はおられなかった。教師生活に不慣れな私は、甘やかされます

きているのではないかと不安でさえあったが、それだけに謙虚に、懸命にやらなければ……と強く思った。

山田校長は厳格で、いわば頑固一徹な反面、実に温い思いやりと心情に満ちた、ときには子供のように純粹な一面を覗かせるお人柄であった。言葉を選ぶようにして自信たっぷりである礼拝時の説教は、まさしく先生ご自身であり、負けず嫌いの先生の面目躍如たる内容であって、今なお私の耳に響いている。

私たちにとって、先生が一言、「君、どうだ」といって近づいて来られるほど励まされることはなかった。無暗と張切らざるを得ない気持ちにさせられたものだ。規模の小さい香里だったが、多くの先生方が山田先生を中心に自然に集まり、雑談に花が咲き、笑声が起こる……。忘れ得ぬ日常の場面であった。

先生の絶大な吸引力は、結局、教育者としての信念と清教徒的信仰と、それにもまして先生の天性に由来するものであったと推察する。先生は真正なる教育家であり、牧者でもあった。厳しかったけれど、「……生徒を鄭重に取扱う」という校祖の遺訓をそのまま実践された人でもあった。

◇教室

生徒たちに関して率直に二点を書いておきたい。一つは、いわゆる同志社的氣質が、従来大阪の風土で育って来たこの新しい学園に果たして根づくのかどうか、という点。当初私はそれが気懸りであった。特に宗教々育は、私の観る限り、ある種の情操センチメントと感受性センシビリティを必要とするものであるので、いささか不安だったが、これもまた、杞憂にすぎず、私自身の無知と偏見に基づくものであることが次第にわかってきた。元来、若い生徒は宗教行事であれ何であれ、優れたもの、美しいものには感動するものだ、という自明の公理を私は見落していたのだ。担当の先生方は大変な努力を払われたが、日を追うにつれ、この問題は質朴で真面目な生徒の中にスムーズに反応し始めたのであった。

第二は、より具体的かつ深刻な学力平均の問題であった。小教の著しく優秀な生徒もいたけれど、今日と比較して平均中位の比率が低いというのが事実であった。私たちは年度によっては、「もう少し何とかしなければ……」といった一種の危機感にさえ見舞われるのだった。この「壁」を破るのは容易ではなかった。

たし、どの先生方も余り口にはされなかったが、日々の工夫と努力を協同して積み重ねる以外になかった。問題は一部、生徒の心理的側面にも原因があったように思われる。歴史と伝統の浅い故に、嫌な表現だが、何かしら『支流意識』、とても呼ぶべきある種のコンプレックスが彼らの根底に蟠っていて、自由な活動を疎外し、抑圧していたのではあるまいか。先生方の謙虚な精進は、一貫してこれとの闘いであったといっても過言ではない。私の気持ちは複雑だったが、生徒を愛し、誇りを持たせ、辛抱よく激励を続ける外に道はない、と思った。いずれにしても、こうした意識から次第に解放され徐々に充実していくのには、長い年月にわたる私たちの協力、生徒側の自発性、客観情勢の変化を不可欠としたのであった。

ともあれ、不十分な点が多々あるにかかわらず「香里もやそこまで来た……」というのが私たちの偽らざる感慨である。

昨今、しきりと私の心にバイブルの一句が去来する。たとえば、

「一粒の麦もし死なずば、一粒のままにてあらん。然れども、もし死なば……」。

(香里中高教諭・英語)

香里学園のあゆみ

磯 部 良 夫

同志社香里中・高等学校の前身である偕行社附属中学校、第二山水中学校、香里中学校、香里高等学校の沿革を同志社との合併まで記し、主なものについて加筆していきたい。

昭和十四年六月一日 大阪市今橋、浅井家より公益献金の申し出あり。あたかも偕行社理事会、偕行社小学校において中学校創立を企画中のため、これを基金として設立の議成立、創立委員会、建設後援会組織

昭和十五年三月一日 大阪偕行社附属中学校設立認可

昭和十五年三月三十日 校地地鎮祭執行

昭和十五年四月六日 偕行社附属小学校内

仮校舎において開校、入学式挙行

昭和十六年二月一日 昭和十五年秋、山下亀三郎氏の献納資金により財団法人山水育英会ができ、第一山水中学校、山水高等女学校創設、設立の趣旨が同じため同会に合流

昭和十六年三月三十日 新校舎第一期工事竣工、移転。

昭和十六年五月十四日 校名改称認可、第二山水中学校となる。

昭和十六年十一月三十日 新校舎第二期工事竣工。

昭和十八年二月二十日 新校舎第三期工事竣工。

昭和二十年三月二十日 同窓会結成。

昭和二十一年十二月一日 財団法人山水育英会より離脱。

昭和二十三年四月一日 新制中学校、新制高等学校設立認可。

昭和二十三年十二月一日 財団法人第二山水中学校を財団法人香里学園と改称認可。同時に校名を香里中学校、香里高等学校と改称。

昭和二十五年九月一日 創立十周年に際し新校歌制定。

昭和二十五年十月十日 創立十周年記念式

昭和二十五年十月三十日 同志社との合併問題協議。(教職員懇談会)

昭和二十五年十一月十六日 合併第一回交渉委員会。以後六回に及ぶ。

昭和二十六年三月三十一日 同志社理事会香里学園との合併を承認。

昭和二十六年六月七日 香里理事会合併と決定。

昭和二十六年七月五日 同志社、香里学園合併調印式。

昭和二十六年八月二十九日 同志社香里中学校、同志社香里高等学校設立認可。

昭和二十六年九月十二日 合併記念式。

昭和十四年五月大阪偕行社理事会で軍人の子弟教育、とりわけ入学難、転学難のことが話題となった。当時大阪府北部の府立校の合格率は50%以下で入試地獄は深刻化していた。戦争の長期化本格化に伴い、出征する将校の子弟の教育について後顧の憂をとり除くことは喫緊のことであった。そこで「男子中学校だけでも早期に実現したい」というのが理事全員の一致した要望であった。

昭和十四年九月二十日の朝日新聞に「偕行社中学の敷地北河内郡に決定す。豊野、友呂岐に跨る二万坪」の見出しで買収完了の記事が掲載された。校地選定には他に四つ程候補地があったが香里在住の某氏の土地提供（八千坪）の申出あり、また京阪電鉄からの寄

付、誘致運動もあったようだ。同年十月二十四日将来高等学校（旧制）を建設することを考慮し一万坪追加買収を決定している。新聞報道より前昭和十四年六月十六日校舎建設委員会発足、委員長は理事長の遠藤春山少将であった。遠藤少将は中佐時代同志社高商の配属将校であり、所謂神棚事件の時は同志社と軍部の間に立つて解決に努められた人である。「学校教育は同志社の如くあらねばならない」と常にいつておられたという。設計者は森忠一氏で京大工学部、大学院で建築設計を専攻、さらにパリに留学、建築学を研究した英才であった。昭和十四年八月応召され大阪師団経理部におられたのは本校にとって幸運であった。資材難の中であつたが軍の援助で工事は進捗し十六年春には大方できあがつた。さすが森氏の設計によるものだけにそのたたずまいは見事なものであつたようだ。同氏はそごう百貨店、新歌舞伎座などの設計者としても知られている。工事は第三期まで戸田組が担当した。後年の同志社香里の新建築がすべて戸田組であるのも奇しき因縁である。

終戦後客観状況の変化に伴い、山水育英会を離れ、引きつづき学制改革により新制中学校、ならびに高等学校に切り替え二十三年には財団法人香里学園と改称した。昭和十五年創立以来昭和二十五年まで前半50年は戦争の最中から末期であり、後半の50年は敗戦の混乱時代であつて生徒は落ちついて学業にいとむという機会がなかった。第一期生が学徒動員先の校方工廠で昼休みの一時を利用して同窓会の結成式をあげたということだけで大体当時の状況が想像できる。在学中教室で勉強できたのは第六期生がはじめての生徒であつた。

昭和二十二年四月私は第二山水中学校に就職した。新制中学の発足が伝えられ、公立中学の受け入れ態勢不十分なこともあつて、この年の入試には優秀な者が集まつた。新入生は五クラス編成であつた。設立した陸軍の威光が働いていたためであらう戦時中に建った校舎にしては立派なものであつた。教壇に立ち五年生を教えてみて質のよいのに感心したし卒業生の進学先などを知るに及んで創立の意気込みを汲みとつた。四年生、五年生には「山水」の気風が残っているのを感じた。選

抜野球の補欠校に選ばれ校内に活気がみなぎっていた。翌年新制香里高校の三年生には前年の第二山水中学校五年生が五分の二程残って編入し一クラスになったものであったが、教育制度の変更のためか、社会の急激な変化がそうさせたのか校内の空気が大分変わってきた。二十五年三月には新制中学三年生二六二名が卒業したが府立高校に進学する者が多く深刻な問題になってきた。二十五年四月香里高校は一年3クラス、二年2クラス、三年2クラス。一クラスの人員は当時としては極めて少ない四十名前後というさびしさであった。終戦間際に受けた爆撃による校舎の破損、痛手は二十五年の夏期休暇、窓硝子の修理を以て復旧を完了したが、同年九月三日のシェーン台風で再び相当な被害を受けた。丁度この年は創立十周年にあたり記念事業を計画中であつたが、台風の被害甚大のため事業を縮小せざるを得なくなった。だが、十周年を契機として学園の発展を祈る意気込みが校内に横溢してきた。十月十日記念式典を挙行し、九月一日に制定していた新校歌を全員で合唱した。この校歌は現在の中高両生徒手帳に「春さりくれば」と題して掲載されている。

作詩作曲とも教員の手によるものである。詩は香里の風物を賞で、新教育制度下における指針を生徒に示した立派なもので、曲も音楽科の現教諭が心血を注いだホ長調の生氣に充ちた美しいメロデーである。この後昭和二十六年には合併となるためこの校歌は香里学園の挽歌といえるかもしれない。だが香里の丘で多感な一時期を過す生徒には、詩の中にまた曲の中に心を打つものがあると信ずる。三十周年にあたりこれからは非歌ってほしいものだ。つい最近、高校二十八年三月卒の同窓会が60余人の出席で開かれ盛会であつたが、カレッジソングのあとこの歌を全員で高らかに、なつかしく歌い散会した。

春さりくれば

山本 弘 作詞
八木 和成 作曲

一、春さりくれば 岡の辺に 萌え出る草のもろ草の 若く直ぐなる 力もて 学びの業に 励まばや ああ この丘のここに 香里 我らが 学の園

二、夏はすがしき 池の面に ゆれる白雲

流れ雲 白くきよらかな 想いもて 真理の道を 究めばや ああ この丘のここに 香里 我らが 真の場

三、紅葉時雨れて 山風の 松の梢を 翹ける秋 高く牙え澄む 誇もて 自由の鐘を鳴らさばや ああ この丘のここに 香里 我らが 自治の塔

四、霧たちわたる 淀の瀬の 摂河の広野 みはるかし 寛くゆたけき 心もて あまねき愛を 謳わばや ああこの丘のここに 香里 我らが 愛の郷

また合併前の香里学園は演劇・音楽活動が活発で文化祭はこれらの発表会で盛況であつたし、当時大阪朝日会館学生音楽友の会（AGOT）、演劇友の会（AGET）に入会する生徒が多く、渴望していた文化の泉にふれようと努めていた。運動部でも卓球部・ラグビー部の活躍が目覚しく校内新聞の記事を絶えず賑わせていた。

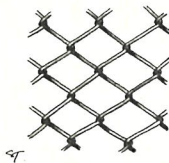
昭和二十五年頃から生徒数が減りだし府下の私学はどれも苦難の時代に入った。中学

校から成績のよい者が公立高校に移るようになり、何とか大学との連繋がある安定した状態を希求する空気が強まった。早稲田大学との合併交渉もそのあらわれである。この話はある程度進んだが一年で打ち切られた。時に父兄有志の斡旋により同志社との合併問題がもちあがった。度重なる理事会・教員会議の末、生徒の推薦による大学進学を最大の意義と認め、同志社と香里側委員との六回の交渉の結果、合併が決定したのである。わずか数年の間に香里の歴史の歯車は大きく回転したのである。勿論賛否両論、紆余曲折はあったがこれは前途に明るい希望をいだかせるもので、まことに最良の策といわねばならない。二十六年九月十二日合併記念式挙行。「あまつましみず流れきて……」生徒が殆んど初めて経験する学校礼拝、「香里中高」との惜別、新しいものへの期待、不安、若い心は大変なショックを受けた。教員は機会あるごとに生徒に話し、違和感わだかまりをなくするよう努めた。当時学校新聞部の顧問であった私は「香里タイムス」第五十号（26・10・7発行）に次のように書いている。

『二階から聞こえてくる讚美歌の歌声にも

元気が溢れている。合併記念式、高木校長退任、山田校長新任の式が矢継早に済み校内生活も軌道にのってきた。同時に生徒諸君の心の中に今までにない何か温和なゆったりしたものを感ずる。これは単に目新しい様式に對してもう驚異的に珍奇的に接していないからだと思う。やや荒びかけていた今までの状態が合併を一つの転機として払拭されることを祈るや切である。もともと温良で素直な特徴をもつ諸君であるから同志社の立学精神たる徳育を宗教的雰囲気で大いに磨くよう努力されたい。幾多の変遷を経て文字通り百八十年の廻転をした現在、培われてきた良き伝統を廻転した線上に強く深くのせ今後の発展に力をそそぎたいものである。……』

（香里中・高校教諭・理科）



香里中高における キリスト教々育の現状

——その立場と実際——

佐 野 昇

〈その立場〉

学校法人同志社が学校法人香里学園を合併するに際して、同志社内にて反対意見があったにもかかわらず、合併を決意した理由は、当時の大塚節治総長が「香里学園との合併についての報告」（昭和26年5月）の中で「この合併に依りまして、宗教々育上最も重要にして効果的な中等、高等教育機関を増設し、同志社大学精神教育の基礎培養に一進歩をなすこと」と述べている。また「香里学園合併要綱」（昭和26年7月）に「一、同志社立学精神により教育せしめること 二、合併のかたちは香里学園を同志社に吸収のかたちをとること 四、在学生教職員は同志社の学生、同志社の教職員、卒業生は同志社の校友とすること 但し同志社の立学精神に同和しないものは除くこと」とある。これによって「学校法人同志社寄附行為」「第二条本法人は教育基本法に従い、キリスト教を教育の基本とする学校を経営し、もって教育の実を挙げることを目的とする」ことになる。従って、教育基本法、教育職員免許法などに準ずるのは勿論だが、特に「文部省訓令第八号」（昭和20年10月15日）「私立学校ニ於テハ自今明治32年文

部省訓令第12号ニ拘ラズ法令ニ定メタル課程ノ外ニ於テ左記条項ニ依リ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ得(1)生徒ノ信教ノ自由ヲ妨害セザル方法ニ依ルベシ(2)特定ノ宗派教派ノ教育ヲ施シ又ハ儀式ヲ行フ旨學則ニ明示スベシ(3)右実施ノ為学生、生徒ノ心身ニ著シキ負担ヲ課セザル様留意スベシ」を確認したい。溯って「同志社通則」（明治29年9月）、「第一条 知徳并行ノ主義ニ基キ教育ノ業ヲ挙クルヲ以テ本社ノ目的トス 第三条 本社ハ基督教ヲ以テ德育ノ基本トス」「教員心得」（明治24年10月30日）「一 毎朝禮拜堂ノ談話ハ生徒ニ裨益ヲ予フルヲ以テ目的トスル事 但シ談話ハ正教員順番ニ勤ムベシ 一 普通専科ノ別ナク凡ソ教員タル者ハ毎朝禮拜堂ノ集リニ必ず出席シテ生徒ノ好模範ヲ垂ルベキ事」、また、キリスト教々育の目的としては、「同志社大学設立の旨意」（明治21年11月）に「若し夫れ此事を目して基督教擴張の手段なり、伝道師養成の目的と云ふ者は、未だ吾人が心事を知らざる人なり、吾人が志す所の者、尚ほ其上に在るなり、吾人は基督教を拡張せんが為に大学校を設立するに非ず、唯だ基督教主義は、実に我が青年の精神

と品行とを陶冶する活力あることを信じ、此の主義を以て教育に適用し、更に此の主義を以て品行を陶冶する人物を養成せんと欲するのみ」とある。本校のキリスト教々育の立場は以上に準拠しようとするものである。

〈基本構想と現状〉

宗教々育と宗教それ自体、キリスト教々育とキリスト教信仰とは決して同一ではない、教育レベルでの取扱と信仰レベルでの取扱とは、勿論重層するところもあるが質的に異なることは言うまでもない。更に学校教育での宗教々育の場合、私学であっても公教育の場合であるから、その固有の使命も公的でないければならないのは当然である。宗教々育は人間形成の基礎に関わるものであるから、それは単に専掌的な分野によって充足できるものではない。学校全体としての姿勢が基本である。その土台の上に立って、校務分掌的、教科的な活動が活きてくる。従って、その各々に対応する配慮と計画が必要である。

(第二) 総合的学校教育としての分野A、生活教育としての宗教々育。学校生活全体の精神的実践の在り方として、個人的在り方や対人関係の基本において配慮されるべき

である。教職員相互、教職員対生徒の在り方、具体的には日常生活の実践を通しての感化であり、個人の真摯さと人格を尊重する対応などがそれである。信仰やイデオロギーの違いを越えて、人としての基本的普遍的在り方として、全教職員が熱心に取り組んでいるが、今後の課題でもある。

B、特別教育活動としての分野、学校の教育行事や集会を通して実施される分野で、この分野を主として担当するのが校務分掌としての宗教部である。教員互選の主任一名(任期三年再選不可)、校長が人事委員会に諮問して任命する副主任二名及び七名の教員で構成する。分掌内容は次の通りである。①礼拝に関すること。礼拝は短時間礼拝(20分)と長時間礼拝(50分)。原則として毎朝一時間目終了後に行なうが、外的諸条件と教育的配慮から中高別曜日割当制で実施している。中学は月金、高校は火土、水曜二時間目に長時間礼拝中高隔週、木曜はヌーン・チャペルとして憩いと出会いを目的にした自由参加のチャペル・レコード・コンサートを行なっている。短時間礼拝の講師は全教員、長時間礼拝は外来講師である。名称を「礼拝」としているが

教会礼拝と区別を明確にするために、次のように定義づける「キリスト教主義教育の方針に基づく礼拝であって、その内容は立学の精神の確認、継承、強化、キリスト教精神の伝達、その他本校としての教育遂行に資することを以てその中心とし、その間において豊かな情操と良き生活慣習を涵養する」(昭44年9月)、要点は学校礼拝(chapel service)は教会礼拝(worship service)と異なり、信教の自由に基づくものではなくて教育の理念に基づく宗教々育活動であることを明確にした点にある。従って、生徒、教員は全員出席すべきものである(出席点呼は行なっていない)と定めている。②宣教活動に関すること。自由参加の聖書会や祈禱会など、③信仰指導に関すること。宗教関係を主とした個別指導、希望者への教会紹介など。④各種宗教行事に関すること。キリスト教暦に基づく特別礼拝や行事など。⑤各種宗教々育に関すること。春秋二回の宗教々育強調週間など。⑥生徒宗教委員会の指導。各組一、二名の宗教委員を定めて組織し宗教部関係活動及び各種学校行事に協力奉仕する。⑦善隣運動に関すること。花の日問安、クリスマス献金など。⑧外

部宗教団体との連絡交流折衝に関すること。

⑨その他創立記念日、校祖永眠日関係行事、校内各種式典、新入生指導合宿、林間学校など学校行事の分担協力など。である。現在簡単な月報は出しているが、広報活動と個人指導体制の充実強化が今後の課題である。

(第二) 教科教育としての分野

教育職員は教育職員免許法により授与する相当の免許状を有する者でなければならず、宗教科もその対象教科として定められている。宗教科は教科として成立つ学問的教育であるべきで、単なる私人的憶見や所信、信念や信心の宣伝、特定宗教の布教を主要目的としたものであってはならない。それは客観性と普遍妥当性を持ち、事実性または真実性のある内容を主としたものでなければならず、教育課程による段階的教育で、正常に配慮された学力テストによって教育効果の評価可能なものであるべきである。これが本校での宗教科の基本的立場である。担当者は専任教諭二名、講師二名である。各学年週一時間必修の科目「聖書」に関しては以下の通りである。「中学課程」(目的) 同志社に学ぶことの意義を考え、人間の尊厳と問題点を考えて豊か

に正しく生きるために必要な宗教的教養を身につけ、宗教的倫理的判断力を養う。聖書に関する正しい知識を通して精神的・人間的成長を計り、併せて読解力と思考力をつける。

(総主題) 聖書の教えとわたしたち。(1年) 聖句紹介、新島襄の生涯と同志社、宗教、キリスト教、聖書に関する常識的知識。(2年) 旧約聖書の内容紹介とその教え。(3年) 新約聖書の内容紹介とその教え。

「高校課程」(目的) 歴史の中で生み出された聖書の中に「神」のことは聴き、ここに人間とその歴史の救いがあることを学び、自分との関連において、キリスト教の内容理解を深め、更に、それを土台として、われわれの生の意味と在り方、生き方を追求する。あわせて、読解力と思考力とをつちかい、歴史的社会的なものの観方をやしなう。(総主題) 人間の歩みと聖書、(1年) 同志社の精神と新島襄、聖句解説、宗教について、聖書について。(2年) 聖書の思想とキリスト教。(3年) 人生論。基本構想は、聖書について学び、聖書を学び、聖書から学ぶということである。評価の観点は、①知識と理解力、②思考と批判力、③問題意識と判断力、④宗教・倫

理に対する関心・態度、である。

高校の教育課程改定により、高3の選択科目として「キリスト教特論」を設け、主題の選択、研究過程、論文作成などの自主的な学習体験をさせ、形成的評価を試みる。

(第三) 課外活動としての分野

教職員有志による自己啓発グループ、研究、実践活動、生徒の自主的研究、実践活動。宗教それ自体の深みにふれる大切な分野である。現在はクラブ宗教部の聖書研究、討議、讃美歌集会があるが、今後の課題である。

〈むすび〉

キリスト教々育は、後退は容易だが充実に至難である。理由あつてのことだが、過去に種々の後退が行なわれてきた。礼拝の回数減やテスト中の廃止などである。「内容なき形式は空虚」だが、また「形式なき内容」は現実性がない。個人的努力や犠牲も必要だが限度がある。今後は組織的に強力に支援助力する具体的な責任体制を同志社として確立し、人事、資金、設備等の面の強化充実を配慮してほしいものである。

(香里中・高教諭・宗教)

香里中高の思い出

小山 義雄

僕は中学、高校の六年間を香里の丘に過したわけですが、先日教育実習という機会を得て四年振りに母校へ帰って参りました。

懐しい先生方や在学中の友人、そして大勢の後輩達に囲まれての二週間という期間を送る中で、実に様々な思い出が胸中を去来しました。往復の通学路の様子は以前と全く変わらないうし、中学生の時に親しい友人とだけ通った抜け道などもそのまま、そんな道で香里の学生服を見かけるとなんだか昔の僕達を見ているような気がして、もう何年も会わない友人達の笑い声さえ聞こえてきそうな感じがします。そうこうして香里の丘に着いて、講堂、校舎、運動場などを見ればまた、入学式や卒業式、礼拝、授業、文化祭、体育祭、など思い出には尽きないものがあります。

そしてその中でもとりわけ懐しく思い出されたのはクラブ活動です。香里中高においては受験の心配がないせいかスポーツ系、文化系ともにクラブ活動が盛んで、僕も書道部と文芸同好会に所属していました。そしてそればかりでなく、大学でも四年間書道部に在籍し、文学の方も同人誌などで現在も小説を書いています。もし中学高校時代にクラブを

やらなかったら両方とも僕には無縁のものだったと思います。くわえて、そのクラブ活動を共にした友人達との出会いがどれだけ自分を豊かにしてくれたかを思うと何気なく入部しただけに有り難い気持ちでいっぱいです。

書道部の方は中二の時に入部したのですが男子校のせいかな人気がなく、先輩といっても高二の先輩が三人と高一の先輩が一人居られるぐらいだったように覚えています。幸い同輩は数人いて、みんなちょっと変わった奴ばかりで面白かったです。

クラブの雰囲気も自由でのびのびとしたもので、いつも先輩の目を盗んでは野球をやったりしていました。それでも文化祭の展示会が間近になるとみんな一所懸命に毎日練習しては先輩に批評してもらい、少しは書道部員らしい活動をしていたようです。それからこれも校風からでしょうか、先輩や先生から御手本を書いてもらう時でも押しつけられたことは一度もなく、みんな自分の好きなものばかりを練習していました。例えば楷書のN君、行書のU君、草書のT君、などというふうにそれぞれ得意の分野があつて、たしかにそればかり書いていただけであつてかなりうま

かったように思います。僕なども卒業するまで隸書とか篆書のようなわけのわからないものばかり書いては有頂点になっていました。

しかし、辛い時期もありました。僕達が三から高一へ進学する時に、もともと他のクラブとかけもちの部員が多かったせいか一人、二人、と部員が減り、先輩が卒業されたこともあって、たったの三人になってしまった時のことは忘れられません。卒業される先輩が、

「ほんまはなあ、俺らの代で廃部にするつもりやったんや。そやけど御前らが入部してくれたからこまでやれた。御前からこれからどうするんや。やっぱり俺らの時に廃部にしたい方が良かったんかなあ。」

と、言われた時は流石にショックでした。本当にいつそのこと廃部にしてしまおうかとも思いましたが、

「ええいつ、ここで負けたら先輩に申し訳ない。辞めていった奴らを見返してやるんや。つぶれてもともとやし、やれるところまでやったる。」

そんなもう開き直った悲壮な決意でした。その三人のうちもしも誰か一人が辞めると言

ってたらきつとその時に廃部になっていたと思います。きつと他の二人も僕と同じ気持ちだったでしょう。四月、五月、と中一のクラスを勧誘のためにまわり、顧問や指導の先生の援助や励ましもあり、なんと十数人の新入部員を迎えた時の感激はちよつと言葉では表現できないものがありました。想えばそれから七年、その時の新入部員の大部分が今年大学の一回生として同志社大学書道部へ入部して、再び僕の後輩として活動しています。以後、香里中高の書道部も順調に発展し、先日の教育実習の時にもたくさんした後輩が練習に助んでいました。七年前のあの時に、本当に頑張ってクラブを続けて良かったと心から思っています。

それからもう一つ、高一の時からは文芸同好会へも所属していました。文芸部がずっと廃部になっていたのを僕達の先輩が三人程で同好会として復活させたものがまた先輩の卒業で廃部になるというので、それを受け継いだかたちとなりました。活動の方は非常に活発で、「カオス」というガリ刷りの文芸誌を不定期に刊行してたのですが、その内容も小説、評論、詩、エッセイ、短歌、俳句にいた

るまでなんでもやっていました。

メンバーも本当に一癖も二癖もある連中ばかりで、今から思うとゾツとします。でもチームワークは部長のK君を中心として抜群で最後までほとんどかわらなかつたように思います。最後までといえば、今その廃刊号が手元にあるのですが昭和五十三年三月十五日発行となっておりますが、それは僕達の卒業式の当日でもありました。実はその前日の夜遅くまで印刷していたのですが、それもいい思い出として覚えていきます。結局、「カオス」はそれ限りでしたが最近また文芸誌がでているようで楽しみにしています。

以上、勝手に僕の所属していたクラブの思い出などをまとまりもなく書いてきました。が、香里中高三十年の大きな流れのなかにこんな小さな歴史もあったということ、大切にしたいと思います。そして歴史とは、先輩からバトンを受け、少しでも自分で走って後輩へ手渡すというアンカーのいないリレー競技のようなもので、僕もかつて香里中高のリレー選手であったということを誇りにしています。